

インタビュー

私たちの国際交流

教官・学生はどのような交流をしているのか。
人と人が出会い、創造する場と機会が生まれる。



大学美術館で行われた交流展のオープニングでは、ソウル大学の学生たちが手作りのキムチで芸大生をもてなした

宮田亮平 ソウル大学校 美術大学との交流展

ソウル大学校と東京芸術大学は姉妹校の提携を結んで十二年になります。最初の数年間は、国際会議講演会を重ねるなど、教官の交流がさかんでしたが、一九九六年にソウル大学校で学生版画交流展とワークショップ、共同制作が行われ、翌年に東京で同様の交流が行われてから、学生レベルでも本格化しました。彫刻部門での交流（九八年ソウル、九九年東京）を経て、この二年は、工芸科がうけもち、工芸のもつ技術や素材についての実体験や意見交換の場がもたれました。

ソウル大学校には、工芸では金工と陶芸の科があります。二年は、芸大工芸科の七講座のうち金工三講座（彫金・鍛金・鍍金）の相互交流、二年は漆芸、陶芸、染織、木工の学生と、ソウル大学校の陶芸の学生の交流が行われました。昨年、十月にソウルに教官二名、大学院生四名を派遣し、セミナーとワークショップを開

催。十一月には韓国から教官二名、彫刻専攻大学院生四名を招いて、特別講義シンポジウム、工芸科交流展を開



催しました。いずれの交流も一週間におよび、制作の話のみならず、未来に向けた文化の立役者として、多くの会話ができたように思われます。

今回の交流で最も印象に残っているのは、大学美術館での交流展のオープニングのとき、ソウル大学校の学生たちがその場でキムチを作ってくれたことです。嬉しさと、あまりの辛さで涙が出てきました。作品だけでなく文化を伝えようという気持ちが、若い世代には自然に身についているようです。芸大側も、留学生が率先して通訳を買って出ますし、学生たちは必ずハンゲル語を一言入れて挨拶していました。

このような活動は、意義を理解していただいている、芸術研究振興財団、野村国際文化財団からの援助なくしては成り立ちません。

今年、デザイン科の交流展を行う予定ですが、建築科や、現代美術を扱う先端表現芸術科、それに保存分野での交流もとても重要でしょう。

交流の主役はあくまでも学生ですが、教官にも、知識や技術を授けるだけではなく、次の世代が活躍できるための土台作りという大きな務めがあります。（みやた・りょうへい／美術学部長・美術学部工芸科教員）

古嶋春子 （笠間）

ヨーロッパ・ピアノ・フォーラム2001



初参加の今回は「日本の現代ピアノ音楽」と題して講義・演奏を行った



義の当日は、芸大の卒業生で、現在ベルリン芸術大学に留学している学生二名も協力し演奏してくれました。

「日本の現代ピアノ音楽」と題した講義・演奏では、最初に日本に洋楽が入ってきたからどのように定着していったか、芸大は日本で唯一の国立芸術大学で日本の伝統音楽の育成にも力を入れていくことなどを説明。そこで、日本人ではじめてベルリンに留学した山田耕祐の「からたちの花」（山田自身のピアノ編曲）と、L・ディートリッヒの「さくら」、別宮貞雄の「五木の子守唄」の編曲を演奏してもらいました。山田耕祐は「メンデルスゾーンのように」と評判でした。

戦後日本の音楽界への欧米からの影響、ヨーロッパでも有名な武満徹に触れたあと、現代の日本を代表する作曲家である野平一郎・三善晃・野田暉行・石井真木の四人の作品を紹介しました。野田・石井の作品は私が弾きましたが、日本の前衛的な作品を知っていたかと思えます。

私が留学していたころは、ベルリンはドイツ音楽の本拠地という印象が強かったのですが、現在では教授の顔ぶれもロシア、イギリス、フランスと多国籍の状況です。演奏した学生にも、東洋人が多く見受けられました。ただ、学生に自国作品の演奏が義務づけられているように、お国柄への配慮もなさ

ヨーロッパ・ピアノ・フォーラムはベルリン芸術大学で隔年で行われ、今回で三回目になります。過去二回はヨーロッパの大学だけで行われていたが、今回はそれ以外の国も招きたいということで、ジュリアード音楽院（ニューヨーク）とチャイコフスキー音楽学校（モスクワ）、ルービン・アカデミー（テルアビブ）、そして日本の東京芸術大学が参加しました。

このフォーラムでは、学生は自国の作品を含むミニリサイタルを、教官は公開講座、レクチャー、レッスンのいずれかを行うことになっています。ピアノ科内で相談した上で、講義と演奏を交えながら日本の現代作曲家を紹介しようと考えました。

芸大からは大学院生が一名同行。講

多田羅迪夫

国立ウィーン音楽演劇大学との 交流オペラ公演

芸 大オペラ科では、ウィーン国立音楽演劇大学との交流オペラとしてモーツァルト作曲のオペラ「コシ・ファン・トゥッテ」を、一九九九年（芸大公演）と二一年（ウィーン公演）に行っていました。

一九九九年の芸大公演ではウィーンから三名のオペラ科大学院生を招き、佐藤功太郎教官の指揮、芸大生オケストラの演奏に、本学大学院生との混成キャストによる演奏会形式での上演を実現することができました。

ウィーンでの公演には、芸大から三名の大学院生が招かれて、約十日間という短期間の練習にもかかわらず、ウィーン側の演出プランに心えてほしい演奏をみせ、大成功を収めました。長所と短所をお互いに知ることができたという成果には計り知れないものがあります。イタリア語というハンディは同じなのにもかかわらず、芸大生はより深く研究し、安定度をみせた点で、ウィーンの学生に刺激を与えたことでしょうか。芸大生のレベルの高さを認識できた機会にもなりました。一方で、ウィーンの学生の、表現の振幅の大きさや感情表現、立ち居振る舞いの面では、日本人とは生活習慣の違いが際立ちました。

今回の新しい企画では、C・モンテ

ヴェルディと同時代の作曲家フランチェスコ・カヴァッリのバロック・オペラ「ラ・カリスト」を古楽科との共同作業で行おうというものです。

ウィーンではこの一月に公演を行ったのですが、芸大は諸般の事情により、ウィーン公演に大学院生を派遣することができませんでした。しかし、芸大での公演には、ウィーンから演出家・出演者の一部を招聘するとともに、ウィーンで制作したバロック・オペラ用のオーケストラパート譜や舞台衣装を、費用折半で使用する予定です。

芸大公演は二一年三月中旬を予定していますが、「ラ・カリスト」の上演としても日本初演という有意義なものになるはずで

「コシ・ファン・トゥッテ」「ラ・カリスト」に引き続き、ウィーン国立音楽演劇大学との交流オペラ公演の継続は、豊かな実りをもたらせてくれることでしょうか。
(「たたら・みちお」音楽学部音楽科教授)



奏楽堂で行われた交流オペラ公演「コシ・ファン・トゥッテ」

れています。
距離と時間の制約はありますが、東京の芸大でも、いずれこのようなフオ

蘇伯民

中国から派遣され 壁画保存を研究

敦煌研究院は、有名な莫高窟をはじめとする敦煌遺跡の管理機関です。研究院は五十年以上の歴史があり、そのなかの保存研究所は保存修復に関して、中国でも大変重要な組織のひとつです。

研究所には三十二名の研究者がいます。日本の大学教授に相当する研究者は三名、助教に相当する副研究員は五名、その下の助理研究員は十名いますが、私は副研究員です。

中国では、一九八〇年代後半から科学的な方法による保存研究が本格的に始まりました。その背景としては、中国政府が文化財保存に力を入れ始めるとともに外国との交流も深まり、それを基盤として発展していったわけです。外国の重要な協力機関として東京文化財研究所と、アメリカのゲティ文化財研究所があります。日本からの支援協力には平山郁夫現学長の大きな支援がありました。芸大へは、毎年のように敦煌研究院から研究員が派遣され、保存科学だけではなく、美術史の研究者も、ここで学んだ知識を大いに役立てています。

私は西安市と敦煌の間、シルクロ

ラムが開けたらなによりです。
(「こじま」はるこ／音楽学部器楽科教授)



ード上にある蘭州の出身です。蘭州大学では化学を学んでいましたが、敦煌研究院で公開募集があったとき、自分の専門分野が生かせるのではないかと、思って応募し採用されました。壁画に使われている顔料の成分分析、保存のための湿度の測定など、貴重な壁画を後世に残すためには、化学的知識はとても重要なのです。

私は二一年六月に来日し、今年の五月に中国に戻りますが、この間、芸大の教官・学生の方々と共同で研究して、とても充実した時間をすごせました。しかも、芸大には優れた実験技術と先端的な分析機器があり、東京には世界中の文献が集まっています。芸大や東京文化財研究所は、日本の資料だけではなく、欧米の文献も充実しているため、大いに活用しました。

また、日本で獲られた最も重要なことには、「どのように保存すべきか」という保存の理念があります。技術や情報の蓄積だけではなく、日本そして芸大は、確固とした理念をもって、文化財保存の道を進んでいます。

(「す・ぼつみん」大学院保存科学研究室客室研究員)

ジェーン・アラシエフスカ 日本の伝統音楽を調査するため イギリスから留学



私は、イングランドの北東部、ヨークシャー州ハルの出身です。子供時代、ハルでは外国の文化と出会う機会はあまりありませんでしたが、第二次世界大戦の時に移民して来た祖父母をおしてポーランドの言葉と文化に接していました。祖父母のポーランド語を聞いて、私はハルという貧しい港町（雨が降り止まず、太陽はめったに顔をのぞかせない）の外の世界があることに気づきました。一七歳の時に、ギリシアのある村の修道院に滞在するまでは、音楽家になろうと決めていたのですが、その町で、初めてパツハやベートーヴェンなどの西洋のクラシックとは違う音楽を聴き、以後、異文化の音楽を研究しようと決心しました。

ケンブリッジ大学には、民族音楽学専攻がなかったので、音楽学を専攻しました。最終学年時、日本の音楽と文化についての講義があり、日本へ行ってみたいと思うようになりました。三年間、JETプログラム（語学指導等を行う外国青年招致事業）により、茨城県のとても小さな町で過ごしました。一九九七年にイングランドに帰国して、SOAS（ロンドン大学オリエント・アフリカ研究学部）で民族音楽学の修士課程に入学し、二〇〇〇年に二年間の文部科学省の国費研究留学生に採用

されました。修士課程の最終学年に、SOASに八丈島から三人の太鼓奏者が来学し、大英博物館見学の案内を依頼されました。国費留学生として来日した時、太鼓音楽を研究するため五つの伝統を調査しようとしてリストアップしたのですが、八丈島の音楽が大変興味深かったため、ほとんどの時間をこの島の伝統の集中的調査に当てることになりました。

日本の大学を経験したのは、芸大が初めてでしたが、SOASとはシステムが違っています。まず、日本では自宅よりも、大学で研究することを求められています。このため私のセミナーの学生は、定期的に集まってアイデアを討議し、情報を分かち合います。ところが、イギリスの大学院では、講義（修士課程）や個人指導（博士課程）のためでなければ、大学に来ることは求められません。SOASのほとんどの大学院学生は、郊外に住んでおり、あまり大学には行きません。その代わりに、インターネットでグループを組み、アイデアを討議し、電子メールで助けを提供しています。これは孤独な勉強のしかたです。

私は、イギリスで育ったので自宅で研究することに慣れていますが、芸大に行き他の学生に会えるのは好きです。日本語で分からないことがあつて

も、いつでも誰かに訊くことができず。SOASに在学する留学生が英語で同様な手助けを得るのは、難しいことだろうと思います。

さらに、芸大では博士課程の学生はティーチング・アシスタントとして採用されています。このシステムは、しばしば日本語で論文を書かなければならない留学生には、とても有益です。SOASでは、助力を求めて関係教官に会わなければなりません。つまり、わざわざ遠い大学に行つて、長時間廊下で座って待ったあげく、いつも助力を得られるとは限らないことを意味しているのです。

とはいえ、私の研究課題の重要な部分は、フィールドワークにあります。場所が東京から遠いため、この重要な調査を行うことは、通学に重きをおく日本のシステムとは相いれないことに気づきました。指導教官の支持があるとはいえ、大学の全ての部署で理解が得られることではないので、八丈島に行くときには、いつもずる休みをしているような気がしています。留学生が東京を離れて調査活動を行うことは重要なことです。大学はこの事情をもっと考慮して良いのではないかと、思っています。

(Jane Arasievska / 大学院音楽研究科国費研究留学生)

姉妹校・大学間交流協定締結校一覧

相手方学校名	国名	締結年月日	対象学部	備考
中央美術学院	中華人民共和国	1989年 4月 1日	美術学部	
ミュンヘン音楽大学	ドイツ連邦共和国	1989年 7月31日	音楽学部	
シュトゥットガルト芸術大学	ドイツ連邦共和国	1989年 7月31日	音楽学部	
ソウル大学校美術大学	大韓民国	1989年 7月31日	美術学部	
シベリウス音楽大学	フィンランド	1992年12月10日	音楽学部	
中央音楽学院	中華人民共和国	1993年 4月 1日	音楽学部	
ウィーン音楽演劇大学	オーストリア共和国	1996年 5月27日	音楽学部	
パリ国立高等音楽舞踊院	フランス	1997年11月10日	音楽学部	
英国王立音楽院	イギリス	1998年 5月18日	音楽学部	
清華大学美術学院	中華人民共和国	2000年11月 7日	美術学部	旧中央工芸美術学院。学部間交流
王立メルボルン工科大学	オーストラリア	2001年 1月31日	美術学部	美術、デザイン&コミュニケーション学部との協定
ソウル大学校音楽大学	韓国	2001年 4月24日	音楽学部	
王立北部音楽院	イギリス	2001年10月12日	音楽学部	
韓国芸術総合学校	韓国	2001年10月29日	音楽学部	学部間交流